

隔月刊 ジャズ批評

since 1967

2016

7

No.192

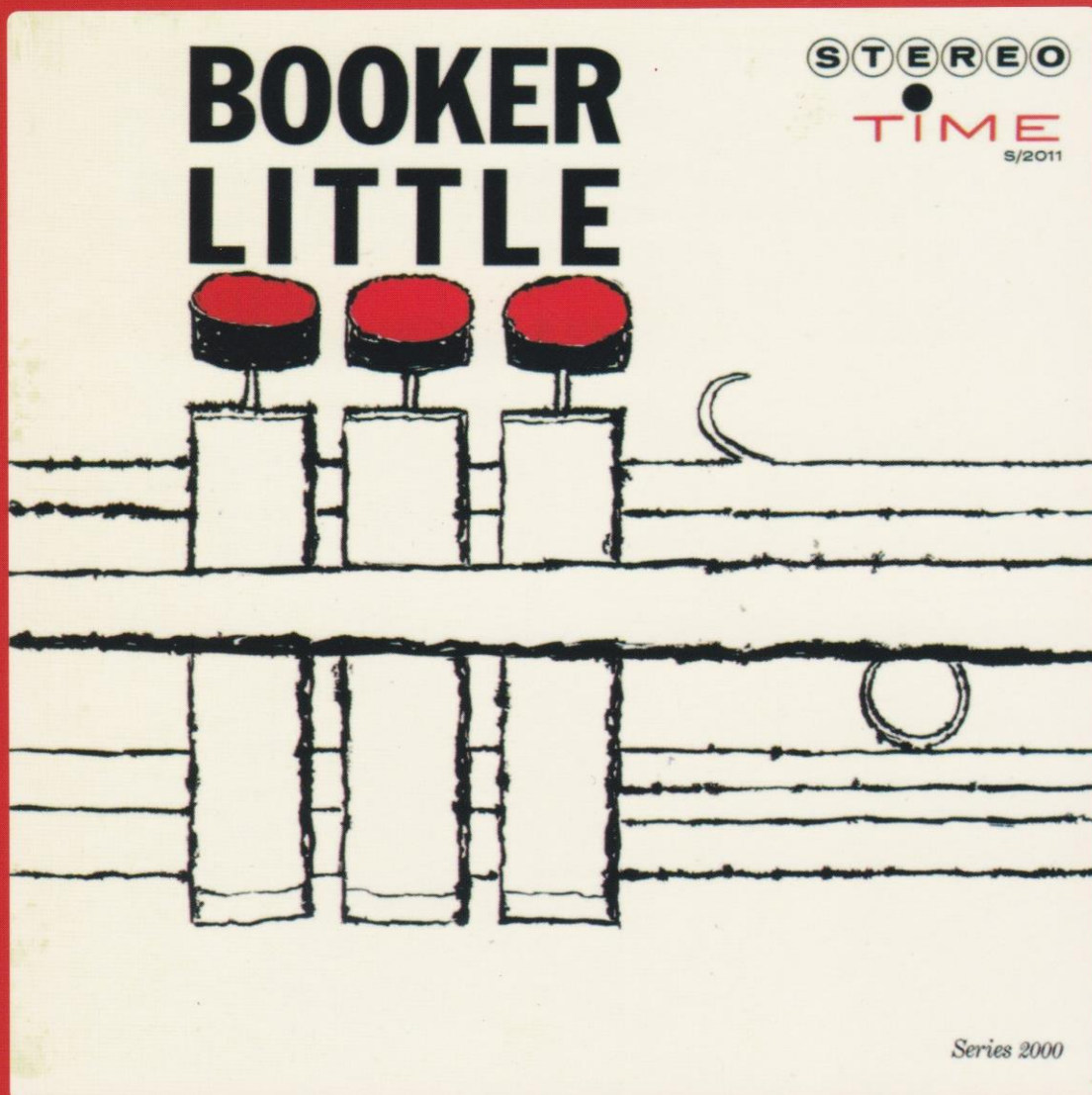
JAZZ CRITIQUE MAGAZINE

特集 **ベスト・オブ・トランペット 50**

みんなの人気者、ジャズ・トランペット

レジェンドから新進気鋭までトランペッター 50名を紹介!

ロングインタビュー：外山喜雄・恵子



Profile

とやま・よしお、けいこ 外山喜雄（トランペット、ボーカル、サッチモ、ニューオリンズ&ジャズ・エッセイスト、オールドジャズ 16mm フィルム・コレクター）、恵子（ピアノ、バンジョー）。デキシー、スウィング等のオールドジャズに生きるジャズ夫婦。日本ルイ・アームストロング協会会長

50年（笑）
夫婦でニューオリンズ



夫婦でジャズ
夫婦でサッチモ

外山喜雄・恵子

LONG INTERVIEW

ルイ・アームストロングやマイルス・デイヴィスなど、先頭に立ってシーンを引っ張るのはトランペッターだった。とくにルイ・アームストロングはジャズの王様としてリスナーからも演奏者からも愛され続けている。ここでは“日本のサッチモ”ことジャズ・トランペッターの外山喜雄さん。そして喜雄さんと共にデキシー・セインツを結成、ピアノとバンジョーを演奏する奥様の恵子さんにお話を伺いました。ニューオリンズ滞在時のお話や日本と海外のジャズに対する考えの違いなど内容盛りだくさんです。聞き手：星 向紀



サッチモ、デキシーとの出会い

——なぜデキシーランド・ジャズ、ルイ・アームストロングに興味を持ったのですか？

喜雄 40年代まではビッグバンド・ジャズが主流でしたよね。でもビッグバンドではどれだけソロをとってもせいぜい8小節から16小節程度。そのため当時のミュージシャンは、より自由を求めてビーバップ、そしてモダン・ジャズへの流れが生まれました。その一方でジャズのルーツを探ろうという動きもありました。ニューオリンズ・リバイバル（デキシーランド・リバイバル）と呼ばれていて、その波の余波がモダン・ジャズと一緒に日本にもやってきたんです。

河野隆次さんの「リズムアワー」というラジオ番組ではニューオリンズ・ジャズを専門に流していたし、映画でも「グレン・ミラー物語」や「ベニー・グッドマン物語」、「5つの銅貨」などなどジャズを題材にした映画が日本で大ヒット。僕がサッチモに魅かれたのは、そうした影響が強いのです。と同時にモダン・ジャズも好きで聴いていたんですよ。アート・ブレイキーが来日し大ブレイク、八百屋さんの店先で「モーニン」がかかっているような時代でした。でもソロに入るとモダン・ジャズは僕には難しく、スウィング・ジャズやデキシーのほうが聴きやすかったというもあります。ちょうどそんな時期に高校に入学してプラスバンドに入ると、先輩たちもジャズに憧れてグレン・ミラーの曲を演ったりもしていたんですよ。そこで先輩

からルイ・アームストロングという人を教えてもらって、今度はルイ・アームストロングに興味を持つわけです。油井正一さんの『ジャズの歴史』という本にも大きな影響を受けました。ルイ・アームストロングの自伝『My Life In New Orleans』の原書を見つけて、苦勞して読んでルイ・アームストロングがますます好きになり、英語の勉強にもなりましたね。大学に進学し、高校時代から出入りしていた早稲田大学ニューオルリンズジャズクラブに入りました。

——そしてジャズの虜になってしまったと。

喜雄 大学生だった1963年64年頃にすごいジャズの巨人の来日ラッシュが起きて、カウント・ベイシー、ライオネル・ハンプトン、デューク・エリントン、ルイ・アームストロングからエラ・フィッツジェラルドまでたくさんのミュージシャンが来日しました。ニューオリンズから幻のバンドと呼ばれるジョージ・ルイス楽団も来日して3ヶ月ほど日本にいたんだけど、大阪周辺での公演でした。友達と一緒に夜行列車で大阪まで行くのはいいけど泊まるお金がなかった。そこで橋の下や土管のなかで寝泊まりしながらコンサートを観に行っていました。とにかく聴きたいという気持ちが強かったんです。そうやって会場に出入りしているうちにバンドのマネージャーに気に入られて、裏口から通してもらって舞台袖から演奏を観せてくれました。それに味をしめて、コンサートを観るときは必ず裏口から行くようになりましたよ（笑）。

——早稲田大学ニューオルリンズジャズクラブで恵子さんと出会ったわけですね。恵子さん

はピアノとバンジョーの両方を弾かれますよね。
恵子 ニューオーリンズジャズクラブにはジャズピアノをやりたくて入りました。でも、本格的にジャズピアノを学ぼうになったのはニューオーリンズに行ってからです。バンジョーをやることになったのもニューオーリンズへ行くことが決まってからなんです。

ニューオーリンズでの生活

——ニューオーリンズに行かれたのはいつですか？

喜雄 1967年12月30日、横浜から移民船に乗っていきました。飛行機もあったけど船の方が安かったのと、荷物をいっぱい持ってゆ



ニューオーリンズ滞在時の外山さんご夫妻

くことができました。当時は、海外へ行く人が年間20万から30万人程度の時代で、誰も外国のことなんかわからない。ましてやニューオーリンズなんて月に行くようなものでしたね(笑)。大学を卒業してからは、一度サラリーマンとして働いていたんだけど、またニューオーリンズからバンドが来日、今度はバスに乗せてもらってツアーについて行ったりしているうちにジャズ熱が再燃しちやって。じゃあいつそのことふたりにニューオーリンズに行ってしまうと。

——どのくらい滞在したのですか？

喜雄 1回目は1年9ヶ月いましたね。大阪万博の年に日本に帰ってきて半年ほど大阪で演奏。でも、ニューオーリンズが忘れられなくて2回目の渡米、今度は3年暮らしました。バリー・マーティンというイギリスのドラマーがバンドを連れてニューオーリンズにやって来て、気に入られて二人で彼のバンドのメンバーに雇われ1年間ツアーをやりました。

恵子 ニューオーリンズには世界中のジャズ好きが集まるので、そういった人たちと仲良くなりやすいんですよ。いま思えばとてもいい経験でしたね。

喜雄 ロンドンに半年いて、そこから大陸に渡ってコンサート・ツアー。その後アメリカ国内を3ヶ月ほどツアーしました。お蔭で、有名ミュージシャンや著名な音楽評論家と出会い、親しくなることもできたのは貴重な体験でした。

——ニューオーリンズで日本人は珍しがられなかったですか？

喜雄 もちろん珍しがられましたよね。なので、僕らの存在は街中に知れ渡っていたみたい。でも、それ以上にかわいがってもらえましたよ。

恵子 私たちはジャズを勉強することにすごく貪欲だったので、そういった気持ちも通じ



お葬式後に楽隊が演奏をしながら行進する様子。傘までが行進用の小道具に



たのかもしれないですね。門前の小僧じゃないけど、サッチモの隣人のような人々と同じような生活をしていたので、ジャズの故郷の感覚やリズムが自然と身につきました。そこでの経験が私たちのジャズの血となり、肉となっているのですね。

——住む場所はどうされたのですか？

恵子 1963年、ジョージ・ルイス・バンドと来日したマネージャーが世話してくれて、彼が経営する有名なジャズ小屋プリザベーション・ホールのすぐ近くにあるアパートに入ってもらいました。

喜雄 アパートの裏がプリザベーション・ホールで、家の中まで音がよく聴こえてきました。ホールは僕らの『学校』でしたね。日本人もよく知っているニューオーリンズで一番有名なホールです。ルイ・アームストロングと同世代や、年上のジャズのパイオニアともいえる人々までも演奏していたんです。そこへ毎日フリーパス！ 時には演奏もさせてもらいました。ホールの鍵までくれてね。

恵子 昼間に、ホールのミュージシャンに来てもらって、私たちが、ヨーロッパから来てジャズを学んでいる『ジャズ学生達』と一緒にジャムセッションを開いたりもしました。そうやってジャズを勉強していたんですよ。

喜雄 アパートはバーボン・ストリートに面したレストランのちょうど裏にあって、僕ら

が住んだ部屋の下にレストランの中庭がありました。ある日、部屋で練習していたらレストランのオーナーに呼ばれて怒られるのかなと思ったら、そこで練習するなら店のパティオ(中庭)で演奏しないかと言われました。お金は払えないけど、2食たべさせると言われたので喜んで引き受けましたよ。その場所で僕と恵子と日本人のベーシスト、スウェーデンから来たクラリネット奏者の4人で演奏していました。

——ニューオーリンズにはお葬式でジャズを演奏する風習があるそうですね。

恵子 そうなんです、ジャズのブラスバンドが出てお墓までは悲しい讃美歌を演奏しながら行進します。でも、お葬式を終えてお墓から戻ってくるときには、ビートがジャズリズムに変わり、賑やかに演奏しながら行進するんです。演奏が始まったとたん、みんな飛び跳ねたように踊り出します。人の魂を突き上げる力がジャズにはあるんだなと思いました。これこそジャズが世界中に広まった理由でしょう。

喜雄 ニューオーリンズは亜熱帯でスコールがあるので、みんな傘を持ち歩くんですけど、それが踊りの小道具になってしまうんです。それから黒人教会もすごいですよ。日曜日のミサなんかに行くと、ゴスペルソングがものすごく建物揺れるくらいスウィングする。なかには熱気とゴスペルと強烈なリズムで失

神しちゃう人まで出たりして（笑）。
——そういった演奏の場に参加したことは？
恵子 もうしょっちゅうですよ。私はジャズバンドの行進について歩くうちにニューオリンズ式のダンスまで覚えました。

喜雄 演奏の仕事ももらえたしね。ちょうど僕らと同世代のミュージシャンが世界各地からやって来ていたから、彼らとバンドを組んで低所得層の白人が来るような小さいダンスホールで演奏していました。週末3日間演奏して55ドルもらえました。1ドル360円の時代で、貨幣価値が違ったんですね…。日本円にすると2万円くらい。僕が日本でサラリーマンをやっていた頃の給料が17800円だったので、週3日演奏するだけで月8万円、部長級の給料になってしまったんですよ（笑）。

——ニューオリンズに住んで大変だったことは？

喜雄 仕事があるときはいいけど、不安定でしたよね。日本に帰るべきか、このままアメリカに残るべきかという葛藤もありました。他にはどうかな。危険な街ではあるんだけど、危ない目には合わなかった。差別もされなかったなあ。

恵子 ルイ・アームストロングが亡くなって、メモリアルのお葬式がニューオリンズで盛大

に行われたときに1度だけカメラのレンズを盗まれたことがあったけど、それ以外で危ない目にあったことはないですね。



デキシーセインツの結成

——その後日本に戻られてデキシーセインツを結成するわけですね。

喜雄 ヨーロッパへ一緒に行ったバリー・マーティンの楽団は、アメリカの有名ミュージシャンをゲスト迎えてツアーしていました。その経験から学んで、私達もアメリカの有名ジャズマンを日本に呼びました。結成当初はアメリカから7、8人招聘してコンサート、そしてレコーディングもしましたね。でも、仕事が少ないで大変だった時期もありました。

恵子 そう、谷間にさしかかった時期もありました。そんな大変だった時期に東京ディズニーランドが開園して、オーディションを受けて演奏の仕事ができるようになったのです。ディズニーの世界での体験からも多くを学びました。ディズニーでエンターテインメントの世界にふれ、私達はサッチモやジャズの世界をより深く理解できるようになったと思います。サッチモとディズニーは、アメリカを

代表する二人の巨人です。夫婦で50年サッチモに仕えて、その半分の25年をディズニーに仕えて…これは私達の誇りです！

——外山さんと言えば「サッチモ祭」も有名です。

喜雄 サッチモ没後10年の1981年に何かイベントをやりたくて始めたのが「サッチモ祭」です。1日目は銀座ガスホールでサッチモの映画を上映して、2日目ヤマハホールでデキシーセインツのコンサート。で、3日目に大丸デパートの屋上で、ニューオリンズとサッチモを愛する13バンドが参加して「サッチモ祭」を開いたんです。毎年楽しみにしてくれるジャズファンの皆様に支えられて、大丸東京店の屋上、日本橋東急の屋上、そして恵比寿ガーデンプレイスのエビス麦酒記念館と会場が変わりながら、なんと34年も続けてきました。残念ながら昨年開催が途切れましたが、また是非再開したいと頑張っています。

恵子 当時、関東でトラディショナルなジャズのお祭りをやるのは私達だけだったこともあって、本当にたくさんの方がいらしゃってくれましたね。私達の息子も小さいときに屋上のデパートで走り回っていたのが、大人になって手伝ってくれるようにまじりました。——海外と日本でのジャズをとりまく環境の違いはなんだと思いますか？

喜雄 日本ではジャズのスタイルの垣根を越えて交流することが無かったですね。モダンにはモダン、デキシーはデキシー。スタイルを超えて交わることは本当に少なかったですね。でも、今は変わってきている。ジャズって、すべてはニューオリンズが原点で、ビーバップやモダン・ジャズもそこから繋がっているんです。マイルス・デイヴィスもサッチモがいなかったら今の俺たちはいなかった、とも言っていますし。アメリカの場合はモダン、ニューオリンズと、わけた考え方はしません。最近嬉しいことに、日本でも少しづ

つサッチモやニューオリンズなど、トラディショナルへの興味を持つ人が多くなっているような気がしますが、業界的にはまだまだモダン・ジャズの志向が強い。でも、僕らから見るとモダン・ジャズ以前の、いわゆるジャズ全盛時代を聴いていた層の人口はけた違いに多くて、世界中に何10億というわけだから、ビーバップ以前のジャズは完全じゃない、みたいな扱い方をされてしまうのはとても残念です。

恵子 なぜ今のジャズの形が定着したかというルイ・アームストロングの音楽がとても魅力的だったからなんです。彼は別に自分がジャズを創造しようなんて思っていなくて、彼の人間性そのものがジャズだったんです。日本ではジャズといえばモダンというイメージが植え付けられてしまって、ジャズフェスティバルでも出演するのはモダン・ジャズ以降を演奏するミュージシャンがほとんど。でも、そういったところに私たちみたいな人たちがトラディショナルなジャズを演奏することで、反対に新しく聴こえるかもしれないですね。

喜雄 ジャズって、譜面が読めなかった黒人の人たちが耳で聞いたものを演奏するのが始まりでしょう。耳で聞いたものを演奏するわけだから、どうしてもメロディを間違えてしまう。それでも和音感覚が優れているから、間違ったメロディでも和音から外れていない。それが、アドリブの起源だから難しくは考えていないんだよね。僕が一番大事にしてほしいなと思っているのは、ニューオリンズに生まれた「ジャズのスウィング感」ですね。このスウィング感があまりにも楽しくて、1920年代、ジャズがあつという間に世界中に広まったんです。ジャズを演奏する人も増えてきてはいるけど、リズムの乗り方、スウィングの仕方覚えてほしいですね。

——ルイ・アームストロングに直接会ったことは？



現地のミュージシャンと一緒に演奏する外山さんご夫妻（左右ともプリザベーションホールにて）

